

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, April 15th, 1955. No. 278.

關西大學學報

昭和30年4月 第278号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）
通卷第二七八号



千里山学園の桜

關西大學學報局



關西大學の建学精神

— 入学式訓示の一節 —

岩崎卯一

二

多数の諸君を今日迎え容れようとしている関西大学という一つの学園は、一体どんな性格のものであろうか。

関西大学は、第一に、長い歴史をその背後に擁している学園である。本年の晩秋、十一月四日の本学創立記念日を中心とした前後数日間に、わが大学は、創立七十周年記念のめでたい祝典を、全学を挙げて盛大に挙行することになつてゐる。明治十九年に、関西法律学校という名のもとに、浪華の都の一角で、力づよい生誕の声をあげてから、わが学園の歴史は、早くも七十年という時の流れを記録している。わが大学の学歌第一節の末尾には、「関西大学、ながき歴史」と唱われている。この句は、単なる形容詞ではない。わが国にあるもろの大学中では、「名門」とまではいえなくとも、たしかに由緒ある学園である。

とはいえ、わが大学は、歴史の古いことを、徒らに誇つてゐるものではない。歴史の旧きは、ややもすると、因襲の垢をも積み重ねて、動態的な現実に適応する進歩性を阻害することが多い。かような点に深く鑑み、わが大学は、全世界を通じて流れている新しい思潮にたいする注視を怠らないとともに、未来における大学の理想形態をも設計図に描きながら、現実の大学を刻一刻世界的な大学に近づけようと努めている。「固い地盤での絶えざる跳躍」こそが、わが学園の姿である。

関西大学は、第二に、一定の建学精神を具現するために、特定団体によつて創立された「私学」である。ここにいう「私学」の本質を、諸君は、入学の当初において、明確に理解して欲しい。「国立」の大学は、わが国の政府によつて経営され、全国民から徴収した租税の一部によつて、その経費が賄われている。現在各府県に散在している数十の国立大学は、すべて同一の政府によつて経営され監督されているのであるから、その間に大小の差はあつても、質的にはすこしの差違もない。いわば、全大学が劃一的である。とりたてていふほどの建学精神を、どの大学も持ち合せていないところに、国立諸大学の著しい性格がみいだされる。かくいへばとて、わたくしは、国立大学の存在価値を軽んじたり、その無記性を非難したりしてゐるのではない。ただ、国立大学の性格をありのままに述べてゐるのに過ぎないのである。

ところが、「私立大学」としての関西大学は、遠い過去において、識見の高い創立者達の一団が、固い信念のもとに植えつけられた独自の建学方針を、不磨の憲章とも仰いで、絶えず継承している学園である。かような建学の精神と方針における独自性、しかも、この独自性の認識に伴う矜持と責務、ここにこそ私学関大の存在理由がある。世間一般には、「官尊民卑」の旧觀念がいまなお強く残つてゐるために、私学を官学の代用品でもあるように誤認する風潮が未だ消えて

いない。しかし、わが関西大学は、この種の風潮から超然とおのれを守り、私学の本質である独自の建学精神と方針との具現をはかり、本学創立者達の期待に酬いたいと努めている。

三

それでは、本学の建学精神というものは、なんであるか。学長としてのわたくしは、自分の責任において、この点についての卑見を、諸君に語るであらう。

そのためには、先ず、本学の創立時代をしばらく回顧してみよう。関西大学の前身である関西法律学校を、約七十年前の明治十九年に創立されたのは、早稲田の大隈、慶応の福沢、同志社の新島というような個人でなく、数人の現役司法官達であつた。初代の校長であつた小倉久氏をはじめ、堀田正忠、井上操、手塚太郎、鶴見守義、志方鍛の諸氏は、皆創立者であるが、当時の大阪地方裁判所に職を奉じていた少壮の司法官であり、その大部分は、いまの東京大学の前身である司法省法学校の出身者であつた。この人人が、勤先の直属長官であつた大島貞敏氏(大阪地方裁判所)と児島惟謙氏(大阪控訴院)とに相談して、創立されたのが関西法律学校であつた。児島、大島の二頭官を除く他の人達は、おのおの講師の役目を引きうけて、フランス法系の法律学を開校当初から講述された。

創立に参画した人人のなかでも、官位が最も高いばかりでなく、年齢にも長じ、しかも硬骨漢の噂のあつたのは、児島惟謙氏であつた。したがつて、児島惟謙氏が自然にこれらの人人の間の頭首格とみられていた。現に、児島惟謙氏が、学校の運営について、若い他の創立者達に与えた厳しい訓戒の書翰が、関大史の貴重な一資料として残つてゐる。これらの点から考えると、創立者達の建学精神に、学校運営の表面にこそその姿を現わしていなかつたが、児島先生の人格と識見とが、背骨として作用していたことは、一点の疑い

をも容れ得ないところである。

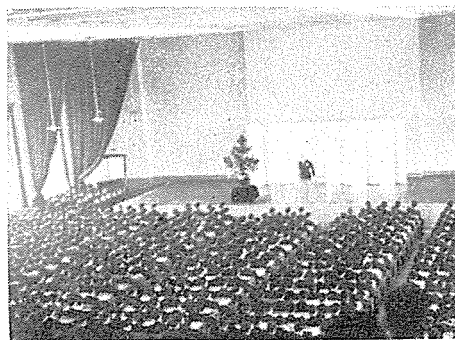
四

児島惟謙氏を頂点とした先覚者達は、つぎのような目的を達成するために、関西法律学校をつくりあげたのである。すなわち、正義としての法の精神を身につけた司法官と辯護士とを養成して、新しい法治国日本の礎石にしようというのであった。正義としての法の護持、名実共に備えた法治国家の建設、ここにわが大学の建学精神があつた。しかも、開設当初の関西法律学校で、これらの人達によつて講述された法は、人間の自由と社会の連帯とを強調したフランス法系のものであつた。

正義としての法を護持することは、当時の情勢をかえりみると、二つの強敵を相手として戦うことを意味していた。その一は、藩閥政治家達によつて引継ぎ壘断されていた初期明治政府の行政権力に抗して、司法の権威を死守することであつた。法の精神を貫くためには、強大な権力装備にものをいわせて脅迫し威圧する当時の政府にたいしても、敢て闘争する識見と勇氣とを持たねばならなかつた。創立者達は、暗黒裡にこのことを学生達に教えたのである。私学として発足した関大が、政府によつて設立され維持されている国立諸大学から、本質的に異つてゐるのは、この点であつた。今日といえども、わが大学は、正義としての法の権威を護持するためには、どんな政府の権力に面しても、敢然として闘わねばならない。「正義を権力から衛れ」という言葉は、「湖南事件」における児島惟謙の思想と行動とを研究したのち、わたくし自身で把握した児島精神、延いては関大精神の一表現であつた。わたくしは、初めて本学の学長に就任した昭和二十二年に、関西大学学報同年十二月十五日発行で発表した一文『関大の始祖、児島惟謙先生を憶ふ——正義を権力より衛れ』で、児島精神を力説しておいた。

その二は、法秩序をかえりみないで、暴力に訴えた

り、無知を利用したり、詭辯を弄したりしなから、善良な一般民衆を苦しめる街のギャング連と、これに氣脈を通じて不正の利をむさぼる三百



入 学 式

代言人との跋扈を防ぎ、民衆一般の人權を擁護することであつた。この種の弊風は、昭和時代の今日でもなおその跡を絶つていないが、本学が創立された当時の明治時代では、一層甚だしいものがあつた。そこで、自由と人權とが、近代法を貫く根本理念であることを、フランス系法制の研究から学んだ若い創立者達は、人權擁護のための最良方策を、正しい法律知識の普及、とりわけ、高い程度の法学教育にみいだしたのである。政府に隸属する行政庁役人の権力濫用に対抗するためには、司法権の独立を死守する識見豊かな司法官を、街のギャングや三百代言人の横行を阻止するためには、在野法曹として人權擁護を職とする辯護士を、創立者達は、関西法律学校で養成しようとな願した。しかも、その目的は期待以上に達成されたのである。

五

今日の関西大学は、創立当時と異り、もはや法学だけや研究したり、教授したりする小規模の学園ではない。法学部だけでなく、経済学部、商学部、文学部と

いうような四学部があり、文化科学のあらゆる部門を研究し教授する一大学園となつてゐる。ところが、昔間の一部では、「法科の関大」などと称して、わが大学の真価を法学部において認めようとする傾向がある。これは、現在のわが大学にとつて、賞讃ではなくして、むしろ侮辱である。いまや、わが大学の四学部は、いわゆる「拡大均衡」の法則を追いながら、おの

おの長足の発達を遂げている。しかしながら、関西大学の独自の建学精神は、終始一貫変ることがない。それはあくまで、「正義を権力や暴力から衛ること」である。言葉の正しい意味での「法治国家」を、大学教育の面からつくりあげることである。児島惟謙先生が、大阪控訴院長から大審院長へ転任せられて僅か五日後に突発した有名な「湖南事件」で、先生自身が示された高い識見と強い勇氣、すなわち、わが国の法律を衛るためには、ロシア帝國の強大にも、日本政府の権力的な干渉にも、屈しなかつた精神と態度こそは、明治時代から遙かに隔つた昭和の今日にいたつても、関大風風の根幹として残つてゐるのである。

六

諸君は、これからの四ヶ年という比較的ながい学生生活を、関西大学と呼ばれる一つの学園で送迎せられることになつた。入学の当初に、わが大学の建学精神を充分理解されたら、「私学」としての関大に学ぶ生徒の矜持と責任とおのおのの胸に秘め、真理の討究と学の実化とに全力を傾けられることと信ずる。そのためには、第一に、本学を一つの「塾」と考え、おのおの弟子の礼をとりながら師匠たる教授の方々に日常接触してもらいたい。第二に、最高の伴となる本学に学ぶ同窓のなから、生涯の伴侶となるような親友をつくられたら。第三に、関大図書館の豊富な設備を利用して、あらゆる種類の書物に親しんで欲しい。これらの三つはいずれも、平凡な事柄ではあるが、これを忠実に実行せられたら、「青春かえりみて悔なし」というような愉快な学生生活が、諸君の前に展開されるであらう。(学長・法学博士)



ポール・クロードル (1949)

『宇宙はこの国に大なる希望を寄せたり』

—ポール・クロードルを偲ぶ—

宮 島 綱 男

我国に關係の深い又我関西大学にも縁故浅からざるフランスの大詩人、大劇作家ポール・クロードル (Paul-Louis-Charles Claudel) が本年二月二十三日長逝した。彼はポール・ヴァレリー及びアンドレ・ジイドと共に近代フランスの文壇に於ける三巨星と呼ばれたが、一九四五年ヴァレリー逝き、ついで一九五一年ジイド歿し、最も年長にして今日まで高齡を保つたクロードルも今や遂に亡く、現世紀の前半を燦然と照した三巨星相ついで墜つ、文壇にそのあとをつぐ者多士濟々たらんも、是等三大文豪を親しく識れる筆者にとつては転寂莫の感深きを覚える。(本誌オ二四九号参照)

ポール・クロードルは一八六八年八月エーヌ県の一小邑ヴィルヌーヴに生れた——この村は戯曲作者で又名優のラシーヌや、寓話詩で有名なラ・フォンテーヌの郷土の近くである。この地方何か史的人物を出す因縁ありやなきや——幼少の頃は父の転任につれ、学校を転々したが、一八八二年母に従つてパリに落ちつ

き、ルイ・ル・グラン高等学校に入りそこでピユルドー教授指導の下、主にカント哲学を学んだが、その無味乾燥の哲理はむしろ彼を悩まし、その結果彼を詩の世界に追いやることとはなつた、しかしついでパリ大学で政治、法律の

学を修めた。時恰かも作風の激しい象徴派の詩人ランボーと相識り、深く之に私淑し、遂に自ら云う『余の物質的因境に初めて一条の光明を投げ、而して余の身心に超自然的靈感を与えたのはランボーの作である』と、そのイリミネーション (Les Illuminations, 1886) を読むに及んで一大心的変化を来した。彼は一八八六年十二月パリのノートルダム寺院に於てカトリック教に帰依し信仰の道に入つた、是に於てか、彼又云う『余の信仰は磐のように固く如何なる説も如何なる書も如何なる世俗も之を動かし得ない、動かすどころか之に触れることさえも出来ない』と。

一八九〇年彼はゲー・ドルセーに入り (ゲー・ドルセーは外務省のある町名で同省の通称)、アメリカ、ドイツ、中国等を任地とし、大いに外交官としての手腕を發揮した、一九一七年リオネ・シャネイロに公使として赴任するや、そこに若き書記官で現在の名作曲家ダリユス・ミヨールを見出した。その後二人の交遊は

日を追うてこまやかになりクロードルの作品にしてミヨールによつて音楽化せられたものが少くない (本誌オ二五一号及びオ二五九号参照)。一九二〇年コペンハーゲンに転任し、超えて一九二一年一月大使として我日本に着任した、一九二七年ワシントンに転任し、そこで所謂ケログ協定 (Kellogg Pact) の締結に關与し大いにその器略を施した。一九三三年ブリュッセルに転任したが、之を最後に一九三五年外交界を去つた。その後彼はイゼール県ロヌの河畔、景勝の地ブラングの別墅 (Château de Brangues, par Morestel, Isère) に退き、

ローヌの流れに独特の詩律を和しつつ自由に静かに文筆にその余生を送つた。しかしこの生活は長い華やかな外交官のそれよりも更に意義深い偉大な存在であつたと云わねばならぬ——概してフランス人はよく働き、よく貯えて貧富各その分に従ひ、老後のために大なり小なり田舎に家屋敷 (Propriété de Campagne) を持つのが生計上の定石乃至理想とするところと云い得るのである。

引退後の彼は比較的多くの時間を、聖書を読み、これを考えることに費した。是即ち彼が聖書の文言に対する皮相な苛評に抗議し、以て中世紀に行われた象徴的解釈を復活せしめんとする努力に外ならない。次の作品はその主な産物であると云うことが出来る。『Toi

qui es-tu? 1936; Les Aventures de Sophie, 1937; Introduction au Livre de Ruth, 1938; Un Poète regarde la Croix, 1938. その他彼は多くの詩を書き、多くの劇を書いたが、すべて象徴的、神秘的、宗教的なもので、その格調は古きにとらはれず、新らしき所謂クローデル律 (Système Claudien) と称せられる。是れ彼がカトリック詩人と呼ばれる所以であつて直接間接にカトリック教に貢献するところ甚大である。熱心なカトリック教徒の間で彼を敬仰すること非カトリック教徒の想像し得ないところである。

一九四六年選ばれて仏国翰林院 (Académie Française) の会員となる(本誌オ二五九号参照)。時に七十八歳、翰林院会員が如何に老大家ばかりとはいへ、彼としては著しく遅きに過ぎると云わねばならぬ。尤も一九三五年、日本を背景としてラ・パタイユを書いたグロード・フレールと競争になり、彼に利が無かつたのである。しかしこの度は自ら立候補することなく選ばれたのはせめてもである。

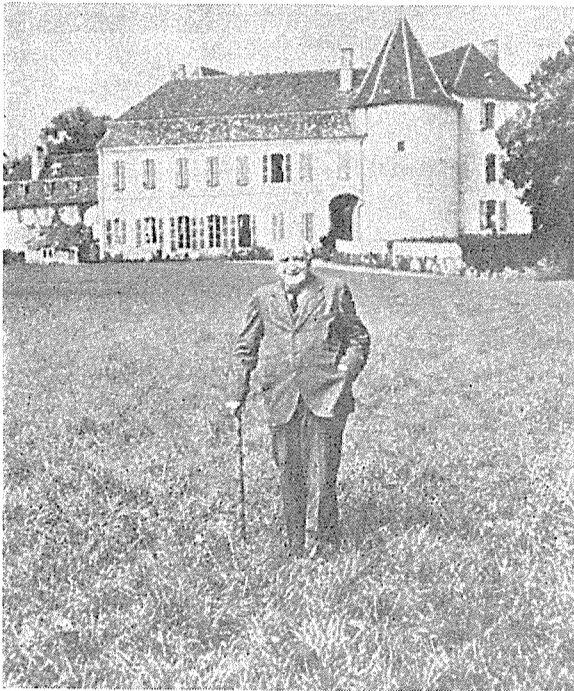
本年二月二十三日ポール・クローデルはパリランヌ通の自宅で八十七年の長き生涯を閉じた。危篤の報に接するや各方面の名士、殊に翰林院会員、演劇関係の人々、外国大使、その他彼の讚美者多数が踵をつらねて訪れた。まつ先に馳けつけたのは、しばしば彼の作品を演じ彼の氣に入りであつた名優ジャン・ルイ・バロー (Jean-Louis Barrault, 1910-) であつたという。臨終の数時間前、翌々日上演されるその作、諷刺劇 *Proteé* の承諾書に署名したが、如何にも劇作家の最後を全うしたものと見えよう。二十三日午前二時四十分『静かに逝かしめよ、死を視ること帰するが若し』(Qu'on me laisse mourir tranquille, je n'ai peur.) を最後の言葉とし、一家一門にかこまれ、

八十七歳を一期として永き眠りについた。葬儀は二月二十八日国葬の礼を以て、一八八六年彼がカトリック教に改宗して神の栄光を受けたと同じ場所、即ちノートルダム寺院で荘重厳肅に行われた。この日政府人、民間人等会する者、寺院の内外を埋めつくし、又全パリ全フランスがこの大詩人に対し、しめやかに敬申の誠を捧げた。遺骸は生前の望みによりブランク別墅の庭園内亡き愛孫シャルル・アンリ・パリ (Charles-Henri Paris) の傍に葬られるという。実に彼の死は独りフランスの損失であるばかりでなく、広く全世界のそれでもあり、殊に我日本は最もよい外友の一人を失つたと云つても決して過言ではない、我関西大学についても亦同じことが云えるであろう。

☆ ☆

前述の如くポール・クローデルがフランス大使として我日本に着任したのは一九二二年一月である。一九二六年十一月まで在任約六年に及んだ、その間日仏外交の円満なる運行乃至発展のために適切な努力を致せることは勿論であるが、更に一層両国間の智的及び文化的関係の伸展向上に尽した彼の功績は偉大である。即ち東京に日仏会館を創立したのは彼であり、京都に關西日仏学館を新設したのも亦彼である。又彼はフランスの美術、例えばロダンの作品を一層よく、我國に紹介し、他方我國の文化、殊に演芸をフランスを

はじめ世界に吹聴し、以て彼我文化の交流に寄与した業跡の数々、実に枚挙に遑が無い。彼は中国に在ること比較的長く、ために我國に赴任前既に東洋の文物に相当深い造詣を有つて居た。日本の在任六年は東洋に關する彼の智識により多くをつけ加えた。かくして彼は明察と鋭断とを以て日本を研究し多くの詩、評論、戯曲を公にした。一九二二年書き下した象徴楽劇「女と影」(La Femme et son Ombre) はよく人の知るところであつて、一人の武士を中心とし、そこに展開する心理的葛藤を描写した作品であり一九二三年音楽杆屋佐吉、舞台装置錦木清方、振付松本幸四郎等の共担により帝國劇場で初演された如きはその一例である。(尚日本に關する著作並にその文献については図書学者天野敬太郎氏執筆の別項参照。)



ブラングの別墅に於けるポール・クローデル (1954)

一九二二年クローデル大使が当時の我皇太子訪仏の答礼として来日したマルヌの勇将ジョツフル元帥に随伴して来阪した。その際大阪の名物としてこの答礼使一行に文楽を見せた。筆者はその説明役として詩人大使と識るところとなつた。彼は文楽を歎賞措く能わず、その後しばしば来阪、その都度筆者は彼と共に文楽を見るを常とした。筆者が仏文で文楽に関する一書を著わしたのは全く彼の勧めに依るに外ならない。大作ではないが、文楽に関する限り欧文で書かれた唯一の文献であり、発行後二十年の今日尚世界の隅々から求本の申込みあるは聊か快とするところである（本誌才二四九号参照）、しかし久しき以来絶版となつたので昨年改版の企てをクローデルに伝えたところ、早速彼は新版に対する一文を送つて来た。再版の公刊遅れて彼の存命中に見せることが出来なかつたのは遺憾である。彼は我国の歌舞伎、能等と共に大阪の文楽を世界に誇るべき古典芸術として典雅の筆をふるうに吝かでない（彼の著 *L'Oiseau Noir dans le Soleil Levant, 28^e edition* 参照）。筆者が一九二二年彼と相識つてより最後に至る三十有余年の長きに亘り、温かい交誼を続けたことは彼を喪つた悲しみの裡にも亦楽しい思出である。本年一月彼自ら認めた年賀状を彼の計報が伝つたその日に入手したのは誠に偶然か神の摂理か、いづれにしても之が私への彼の最後の筆である、藏して以て好個の記念とする。

☆ ☆

ポール・クローデルを我関西大学に迎えて一場の講演を乞うたのは彼が我国に赴任した翌年即ち一九二二年五月のことである。当時我大学は所謂昇格の直後であつて千里山の丘上に、昭和九年鳥有に帰した大学予科の教室木造一棟が淋しく、しかし遠大な理想をにな

つて立つて居たのみで、門もなく柵もなく、近隣一带に一軒の人家とともなく、蓬々たる山野、是れまさに狐狸の郷なりと云う者さえあつたのである。『大学は建物にあらず』とはいえ、かかる粗末な学園に一国の大使で、しかも世界的大詩人を招いたことは今にして思えば無遠慮且つ大胆と云う外はない。大学の名に於て招かれて来た彼は内心さぞ驚いたであらう。大学の記念帖に彼が将来の発展を祈ると書き残したのを見ても彼が感じたところのものを想像するに難くない。素より我等が敢て彼を大学に招いたのは設備でなく心であつた。しかし、その後年を閲すること三十有年その間学運、さかんにして今日見る我大学の発展は蓋し彼の期待にこたえるところのものであらう。筆者が昨年我大学の現状を精しく書き送つたが、早速彼は心から慶祝の意を表わして之に答えた。

クローデル大使来学に関しては、講演の原文並に訳文と共に本誌の前身「千里山学報」第二号に精しく報ぜられて居る。しかし年々歳々人変り且つ三十三年前に発行された学報を得ることはなかなか困難であるから記事の一部をここに転載して当時の模様を想起想像するの資に供する。

かくて当日即ち五月二十七日午前九時三十分、クローデル大使は考古学教授オールツォー氏と同伴、宮島、垂水、白川各理事、小泉教授、木下幹事其他学校関係者多数の出迎を受け梅田停車場に到着、直ちに同駅貴賓室に案内せられ、宮島氏に依つて学校側の人々は大使一行に紹介せられた（中略）。愈々大使一行を本大学に招ずべく自動車にて十三に至り、学校当局者、学生総代等の出迎を受け、北大阪電気鉄道株式会社の好意により立てられた、仏国三色旗を以て飾られた特別電車

に乗り、千里山に向つた。午後一時三十分、校庭並に附近の沿道に堵列せる多数学生の歡迎裡に入るや、山岡総理事、木村拡張後援会長その他学校当局者一同は出でて一行を玄関に迎え、総理事の案内で大使以下階上の休憩室に導かれた。記念帖に別項記載の如き揮毫せられるなどして暫し休息された上で愈々講演会場に入られたのは丁度午後二時であつた。会場に当てられた大講堂は既に数百の学生と多数の来賓とで満たされていたが、一同は頗る静肅に大使を迎え、講演会は次の如き順序で進められた。（イ）仏国歌、本大学音楽部（ロ）仏国大使歡迎の辞、本大学総理事（ハ）同、本大学学生総代（ニ）講演、仏国大使クローデル閣下 通訳、本大学教授、宮島綱男氏（ホ）本大学学歌、本大学学生一同、講演が終り記念撮影が済むと、直ちに大使一行は全校学生の万歳の声に送られて本大学を後に、往路を逆に再び大阪市に出で、更に我が國寧ろ大阪固有の文藝として名高い文楽座に向われた。

総理事の歡迎挨拶

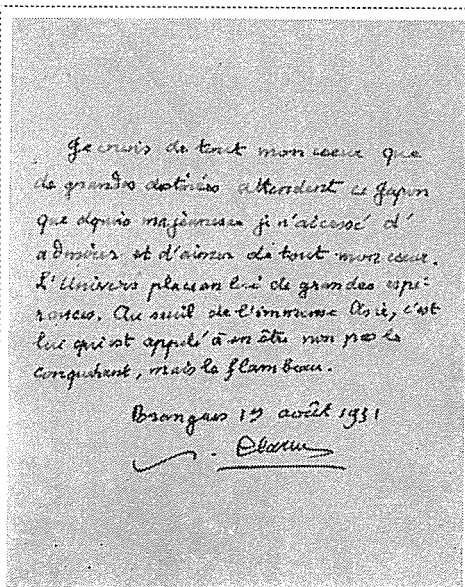
（前略）本日茲に私が本大学を代表して吾々の尊敬する仏国大使閣下を本大学が新に各般の設備を施さんとしつつかある此千里山の地に歡迎するの機会を得たることは非常に光榮とする所であつて厚く感謝の意を表する次第であります。大使閣下には外交官として令聞あるのみならず大詩人として欧州の文壇に重きをなさるる方であるということは夙に拝承する所であります。仏蘭西共和国が特に我國の駐劄大使として閣下を任用されましたのは単に政治的、外交的に両國間の親善を加えんとす

る所以であるのみならず、東西の両文明を精神的に將た又思想的に力強く結びつくる所以であるといふことを固く信ずるのであります。此の意味に於て殊に閣下に敬意を表する次第であります。更に續つて本大学の歴史的因縁について考察するに其貴国との關係頗る深きものあるを見出すのであります。回顧すれば我國に於ける法律学の恩人は実に貴国のボアンナード氏であります。而して同法学者の下に親しく薰陶を受けられました諸先生が今より三十五年前仏蘭西法律教授の目的を以て教鞭を執られたのが抑も本大学の濫觴でありませう。斯の如き因縁を有する本大学に今日閣下を迎うるは吾々をして今昔の感に堪えざらしむると同時に、新たなる刺戟を得たる本大学學生が一層の努力を以て貴国の文化を研究することにより我國文明に貢献する所甚大なるべきを思い欣快措く能わざる所であります。本大学は建設今なお其半ばにも達せず設備万端不充分にして閣下の御來臨を仰ぐべく余りに貧弱に失し誠に恐縮に堪えざる義であります。將來を有する大学という意味に於て今日の不行届は御容赦あらんことを願います。クローデル講演の前おき及びくり(演題「仏語の研究について」)

私は関西大学総理事の只今の御親切なる御言葉に對し殊に本日この場所に於て諸君にお談しする機会を与えられたことに對して深く御礼を申し上げます。御校は我仏蘭西と伝統的に御縁の深い学校である由、この御縁の深い場所に於て諸君とお知合になるということは決して偶然がこの機会を作つたのではなくて、御校の創立以来の目的であ

つた我國の法律を研究するという、即ち同学同主義の實行がこの機会を作つて呉れたのであります。実に御校は所謂正義法律を學ぶ場所であつて恰かも羅馬のプレトリアル(Praetorium de Rome)正義を論じ之を行ふ至高の場所)の権化とも稱し得べきものであります。而して正義なる言葉と法律なる言葉とは同意語であつてこの意味が最もよく表われているのは我仏蘭西語に於てであります(中略)。仏語というものは徒らに優美、好奇心のため又は特殊の専門家にのみ必要にあらずして古來世界共通語として用いられ、又前述の如く思想を表わすに最も適切であるから文学其他諸般の科学の研究に當つて広大なる利益を持つていふ事を御諒解になつたと存じます。終りに臨んで御國に於て仏語の研究が益々盛んとなり、向相互の努力に

依り日仏兩國間に互に健全なる思想を絶えず通ぜしめ且つ親善を運ぶところの一の大橋梁を架設せんことを祈つて止まぬ次第で



余は余が若き日より
 全心をもつて敬愛して
 やまざりし日本に大なる
 運命の待ち設けたる
 をふかく信ずるものなり。
 宇宙はこの國に大なる
 希望を寄せたり。
 広大なる暹羅亞の戸口
 に立ちて、征服者にあ
 らずしてその光明たる
 べき使命を帯びたるは
 実にこの國なり。
 一九五一年八月一日
 ブラングにて
 ボール・クローデル

あります。

バラツク時代の我大学を訪れたことが、クローデルに却て深い印象を与えたのか、時々大学のことを尋ねてくれた。殊に終戦後二度も學生にメッセツジを寄せて青年を鼓舞した。時恰かもアジア民族の問題が国際場裡に於て頓にその重要性を加えて来たのに鑑み、メッセツジの一つを次に再掲する。

丁度この稿を書き終つたところへクローデル未亡人から筆者の悔状に對する礼状が到着した。その一節に「私の愛する夫は最期まで筆をとりつつ世上頌讚の裡に大往生を遂げました。全世界が私に寄せた深い同情に對し感激の外ありません。夫は永久に大クローデル(Le grand Claude)であると信じます」とあつた。希くばレーヌ・クローデル夫人の上に永く幸あらんことを。(理事)

日本におけるクロードル文獻

天野敬太郎

クロードル氏を初めて日本へ紹介したのは誰が何年であるかについては、まだ十分確証を得ていないが、恐らく明治時代にはなかつたのではあるまいか。大正二年（一九一三）、上田敏が「藝文」誌上に詩「椰子の樹」を訳載し、翌三年厨川白村がその著「文学思潮論」の末章のうち、フランスの新進として紹介したが、これ等は初期に属するものに違いない。その後、吉江喬松、竹友藻風、川路柳虹、山内義雄、木村太郎、長谷川善雄の諸氏などによつて紹介されたのであるが、詩や戯曲や評論の邦訳は、クロードル氏の全集の十分の一ほどであろう。それ程に、クロードルの著作は多いのである。著書の数は百種を越え、氏の翻訳書（仏訳）は六種あり、単行本は再刊本も含めば百五十部以上にのぼるのである。全集は一九五〇年頃から始められ既に数冊出版されている。

駐日大使に榮転して来朝するに及んで、大いに歓迎された。一九二七年（昭和二年）二月まで日本滞在中に、著述、出版、上演、講演など多くの業績を残している。一九一八年ブラジル公使時代、リオ・ド・ジャネイロで執筆した詩「聖ジュヌヴイエーヴ」を初めて大正十二年に新潮社から出版した。これはその書名の頭文字SGのスカシ入りの奉書紙を用いた三十二頁の細長い折本（縦一尺八分、横四寸五分）で、桐の板の表紙をつけ、軼入りで大へん日本趣味の装釘である。本文の絵はパール夫人が描き、裏面には、自筆の複写による「東京景物詩第四歌」があつて富田溪仙の堀端の絵が添えられている。又、「百扇帖」(Cent Phases pour Eventail)の初版も東京で発行した。これはまだ見る機会がないが、本文はクロードルの筆蹟を石版にして三冊よりなり、これも細長本で藍色の絹の軼入りのようである。（後年バリーで再刊の洋本は知つてゐる。）前記「聖ジュヌヴイエーヴ」の出版を記念して、同年日本の雑誌「詩理」と「日本詩人」はクロードル記念号を發刊した。翌

大正十三年、親仏文藝会は三十余人の執筆になる「ゆかり」を編集し、その中に特に「クロードル篇」を設け、クロードルに献呈した。その頃氏の作品二種が上演になつた。大正十一年秋「人と欲望」（これも一九一七年ブラジルで執筆）と翌十二年三月帝國劇場において杵屋佐吉の節付による「女と影」がそれである。日本に關係ある著作の二三例を挙げると、「東方所観」のうちに天照大神の天の岩戸の神話を戯曲風に書いたものがあり、「旭日中の黒鳥」(L'Oiseau noir dans le Soleil levant) (一九二二) は主として日本滞在中執筆の隨筆集であつて日本關係の記事が多い。「Docteur」(一九四五) は都々逸の仏訳と英訳を掲載したものである。クロードル氏と他の文人との往復書簡集が三種公刊されている。その一はジャック・リヴィエールとの書簡集（一九二六）、第二はアンドレ・ジイドとの書簡集（一九四九）、第三はアンドレ・シュアレスとの書簡集（一九五二）であるが、そのうち初めの二つは既に邦訳が出来ている。

次にクロードル関係の日本文獻で見聞したものを掲載しよう。見る機会がないものもあるので誤りや洩れがあることと申す。諸賢の御教示を待望する次第である。

○は単行本、昭和二・四は昭和十一年四月發刊の意味である。

詩

Connaissance de l'Est

○東邦の所観 長谷川善雄訳 三三頁 昭二・四

立命館出版部

○部分訳

椰子の樹 上田敏訳 大二・八

藝文 第四年第八号

○上田敏詩集 大一一・二

○上田敏詩抄 (岩波文庫) 昭二・二

○上田敏全集 第一卷 昭四・九

東方所観 日夏耿之介訳

中央文学 仏蘭西文藝号

東明 (椰子樹、鐘) 川路柳虹訳 大一一・二

新潮 第三六卷二号

東方所観 山内義雄訳 大一一・七

日本詩人 第二卷第 号

東方所観 (夜の町) 山内義雄訳 大一一・七

三田文学 第一三卷七号

東方所観 (寺院、夜の町、七月精霊祭、海のおもひ、大地の門、山へ、心の廟、十月、雨、黄るき時) 山内義雄訳 大一一・四

○仏蘭西詩選 (山内訳) 大一一・四

東邦所観 (十月、十一月、雨、黄るき時、大地の門) 山内義雄訳 大一一・一二

○ゆかり (親仏文藝会)

北京隨想詩、靈と水 長谷川善雄訳 昭二・四

新古典 第一号

Cinq Grandes Odes

○五つの大讃歌 長谷川善雄訳 昭二・九

立命館出版部

三三頁

頌歌 上田 敏 訳

日本詩人 第三卷第四号 大二三

○上田敏詩集 大一一二

○上田敏全集 第一卷 昭四九

La Cantate à Trois Voix.

○歌三つの声 長谷川善雄 訳

立命館出版部 一巻頁 昭一〇

カンタタ 上田 敏 訳 大一一二

○上田敏詩集 第一卷 昭四九

La Messe la-bas. 第一卷 昭四九

○光り、附、行列について 長谷川善雄 訳

立命館出版部 一巻頁 昭一三

Sainte Geneviève 新潮社 細長本映入三頁 大一一二

聖ジュヌギエウ第三歌 厚東日路士 訳 大一一五

日本詩人 第三卷第四号 大一一二

○ゆかり 大一一二

○庭 山内 義雄 訳 昭三二

仲展社 菊判 八五頁 昭三二

別詩「都城」より 上田 敏 訳 大一一四

○上田敏詩集 第一卷 昭四九

○上田敏全集 第一卷 大一一四

ほのべらき五月 竹友 藻風 訳 大一一一

鈴 蘭 第二号 大一一二

○ゆかり 大一一二

遠別離 竹友 藻風 訳 大一一三

○ゆかり 大一一三

真昼の聖母 堀口 大学 訳 大一一三

○昨日の花(堀口訳) 大七四

○ゆかり 大二三

シャルル・ルイ・フィリップ 山内 義雄 訳 大一一二

日本詩人 第三卷第四号 大一一五

○仏蘭西詩選(山内訳) 大一一四

読 山内 義雄 訳 大一一〇

現代文学 大一一〇

日曜日朝の祈禱 山内 義雄 訳 大一一三

詩 白孔雀 創刊号 大一一三

○仏蘭西詩選(山内訳) 大一一四

詩 章(原文付) 山内 義雄 訳 大一一四

日仏文化 第一輯 昭二五

共和国戦死者に捧ぐる歌 山内 義雄 訳 大一一五

○続仏蘭西詩集(菱山修三編) 昭一八

バラード、流謫の歌 斎藤 磯雄 訳 昭二九

○近代フランス詩集 昭二九

戯曲 木村 太郎 訳 昭五一

○世界戯曲全集 第三四卷 昭五一

人 質 村田美都子、浅草 晁 訳 大一一二

婦人画報 第三卷 大一一二

瑪利亞に与へられた告知 竹友 藻風 訳 大一一〇

三田文学 第一二卷三三三号 大一一一

○マリヤへのお告げ 長谷川善雄 訳 大一一一

立命館出版部 三三三頁 昭八

○マリヤへのお告げ 昭八

甲鳥書林 B 6 三〇三頁 昭一八

○千九百九十四年耶穌降誕祭の夜 高橋邦太郎 訳 大一一〇

文泉社 四六判 三〇三頁 大一一〇

女と影(第一稿) 山内 義雄 訳 大二三

女 性 第 卷第 号 大二三

女と影(第二稿) 山内 義雄 訳 大二三

改 造 第五卷第三号 大二三

右二点○仏蘭西詩選(山内訳) 大二二

〔上演〕

L'Annonce faite à Marie. クロオデルの宗教劇―巴里印象の

うちから 岡野 馨 大一一〇

社会政策時報 第一六号 大一一〇

L'Homme et son Désir. クロオデル(人と欲望の解説) 重徳泗水

大 観 第五卷第 号 大一一

その外に、人と欲望の音楽に就きて(東京日

京朝日新聞)、人と欲望に就きて(東京日

日新聞)などがある。パリにおける上演

については次がある。

「人間とその欲情」 柳沢 健 大二三

○ゆかり 大二三

La Femme et son Ombre. 「女と影」の舞台装置について 山内 義雄 大二二

女 性 第 卷第 号 大二二

「女と影」の考察―帝劇の上演に際して

ルビエンスキイ 川尻 清潭 大二二

「女と影」の上演前後 大二二

「女と影」の作曲に就て 杵屋 佐吉 大二二

「女と影」の舞台装置 鐘木 清方 大二二

右四点 日本詩人 第三卷四号 大二二

その他、新聞記事に、「女と影」について

(山内義雄、読売新聞、大二三)、クロ

1 デル氏の「女と影」(小寺融吉、都新聞

大二三)、「女と影」を評す(正宗白鳥、時

事新報)、「女と影」につきて(川路柳虹、

時事新報)などがある。

評論、随筆、書簡

Discours sur la Littérature française. 仏蘭西文学論

改 造 第四卷第二号 大一一二

仏蘭西美術について 中央美術 第八卷第 号 大一一

Sur la Langue française. 仏蘭西語に就て

千里山学報 第二号 大一一七

Sur la Langue française. 仏語に就て

今村新吉口訳 大一一八

Tradition japonaise et tradition française. 芸術と宗教より見たる日仏の伝統

改 造 第五卷第一号 大一一一

日本の詩人に寄す 詩 聖 第 号 大一一四

Message au 'Poète japonais' 「日本詩人」への挨拶

A Propos de la Publication de 'Sainte Geneviève' 「聖ジュヌギエウ」の上梓について

右四点 日本詩人 第三卷四号 大一一五

「仏蘭西詩選」序 山内 義雄 訳 大一一四

○仏蘭西詩選(山内著) 大一一四

クロオデルの言葉 辰野 隆 昭二

○仏蘭西文藝閑談(辰野著)六一五

○仏蘭西演劇私観(辰野著)昭三九

表意文字 山内 義雄 昭二七

日仏文化 第三輯 昭四六

雪一杵屋佐吉の音楽を聴いて

散 文 第二卷第九号 昭一〇 長谷川善雄 昭二九

ニジンスキー 散 文 第三卷第一号 昭一一 長谷川善雄 昭二八

ソウエト―地獄の季節 セルバン 第九三号 昭一三〇

能楽の本質 セルバン 第九五号 昭一三二

○前兆と寓話 立命館出版部 一七頁 昭一四 長谷川善雄 昭二五

詩について 文 藝 第八卷第五号 昭一五五

○クローデル随想 立命館出版部 二四五頁 昭一五九

○信仰への苦悶(クロオデル・リヴ イエール往復書翰集) 木村 太郎 昭一七

甲鳥書林 B 6 三五頁 昭一七

○捨身と信仰 那珂書店 B 6 三〇頁 昭一八

芸術と信仰―近代絵画の要素として

の光と色 世 紀 第一卷第八号 昭二四 山内 義雄 昭二六

太陽とともにあれ 群 像 第六卷第一号 昭二六

ロマン・ローランの宗教思想 渡辺 秀 昭二七

世 紀 第三三号 昭二七

○愛と信仰について(クローデル・ジイド往復書翰)

河上徹太郎、吉田健一共 昭二九

ダウイット社 三九五頁 昭二九

クローデル関係

クローデル記念号 文 社 昭二四

詩 聖 第 二 卷 大 二 四

ポオル・クローデル号(聖ジュヌボ

エウ刊行記念特別号) 福士幸次郎編

新潮社 菊判 二八頁

日本詩人 第三卷第四号 大二三

○ゆかり 親仏文藝会編

クロオデル篇(頁二四九―三〇九)がある

改造社 四六判 四九頁 大二三

ポオル・クロオデル ラウリンソン

柳沢 健 昭二九

○現代の詩及詩人(柳沢著) 大九〇

ポオル・クロオデルの劇作 吉江 喬松

新潮 第 三 卷 号 大 九

○仏蘭西文藝印象記(吉江著) 大二五

○ゆかり 大二三

○吉江喬松全集 第三卷 昭一六

ポール・クローデルを迎ふ 柴田 勝衛

早稲田文学 第一八九号 大一〇

詩人クロオデル 厨川 白村

厨川白村集 第三卷 大二四

○厨川白村全集 第三卷 昭四二

ポオル・クロオデル 吉江 喬松 大二二

改 造 第三卷一、二号 大二〇

劇詩人としてのクロオデル 広瀬 哲士

詩人ポオル・クロオデル 井波 清治

右二点 三田文学 第三卷三号 大二〇

クロオデル 平戸 廉吉

英語文学 大

クロオデル、その他 川路 柳虹

新 潮 第三六卷二号 大二二

私の触れ得たクロオデル 増田 篤夫

日本詩人 第二卷第 号 大二九

〔同上〕春と夏のあはひ 増田 篤夫

○ゆかり 大二三

クロオデルの言葉 増田 篤夫

文章倶楽部 第 卷 号 大二二

Paul Claudel 小伝 山内 義雄

ポオル・クロオデルと詩的認識 デュアメル

リギエール

クロオデルの藝術 高橋邦太郎

日本に於けるクロオデルに関する 文 献 百田 宗治

クロオデル号に 高橋邦太郎

右五点 日本詩人 第三卷四号 大二五

ポオル・クロオデルに「詩」 川路 柳虹

ポオル・クロオデルの立場 石川 淳

加特力詩人ポオル・クロオデル木村 太郎

右三点 日本詩人 第三卷四号 大二五

○ゆかり 大二三

クロオデルに関するラセエルの批評 重徳 泗水

印 象 辰野 隆 大二三

○ゆかり 大二三

ポオル・クロオデル考(一、印象、三、感想) 辰野 隆

○仏蘭西文藝閑談(辰野著)六一五

○仏蘭西文学 上(辰野著)昭一八

○辰野隆選集 第二卷 昭二五

棘棠の心 岸田 國士

水時計(クロオデルの「藝術論」を 読みて) 山田 珠樹

右二点○ゆかり 大二三

クロオデルと山内義雄君 高橋邦太郎

世界文学月報 第七号 昭三〇

クロオデル著作目録 上田 敏

○上田敏全集 第八卷 昭五三

ポール・クローデル(詩) 中野 重治

○夜明け前のさよなら 昭五五

○中野重治詩集 リウイエール 昭一〇

ポオル・クロオデル 佐藤 正彰 昭一〇

○エチユード 山内 義雄 昭一八

クローデル 山内 義雄 昭二八

○世界文藝大辞典第三卷 クルテイウス 大野 俊一 昭三三

クローデル論 大野 俊一 昭三三

○現代フランスの文学開拓者 昭三三

ポール・クローデルのロマン・ロ

ラン論 片岡 美智 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

中央公論 第六四年五号 昭二四

ロンドン大学の統計学者

高 木 秀 玄

在外研究員だより

(ロンドン第二信)

この大学には、かつて、アドニー・ユールと並び立つたアー・ボウレイが統計学を講義していたからか、現代のイギリスの統計学界を代表するような、秀れた学者達が集りよつてゐる。学生達も、この統計学にかけては、ケンブリッジ、オックスフォードの両大学をはるかにしのいでいるとの感慨り誇りをもつてゐるようであるし、事実、両大学のアンダー・グラデュエイトを修了した者で、ポスト・グラデュエイトはロンドン大学へやつて来ている者が多い。これは、統計学だけに限らず、「ケンブリッジ・アンド・ロンドン」の学問的な結合は、あらゆる領域にみられる現象である。その点、オックスフォードの学者達は、すこし、孤立の状態にあるようである。

なお、個人の関係より、R・G・D・アレン教授を挙げる。流行おくれの眼鏡をかけ、すこし、痛々しい感じの細い体、これが、ケンブリッジ英語かと思わせる、「どもり」の英語、いつも口から離さないパイプ、この人が、はるばる日本を出発する前に、矢口教授より、「非常に温い感じのする人」であると聞かされ

ていたのであるが、まるで、十年來の師に接するような気持で、私は世話になつてゐるのである。この人の名著「経済研究者のための数学解析」を私の手で翻譯したのであるが、誰れに紹介するときでも、まず、その事を冒頭におかれるので、一寸、てれることもあるのであるが、「一般研究室」では、煙草が吸えないので、困ると我儘な事をいうと、それなら「統計学研究室」の鍵を、どうにかして、手に入れてあげようとの事、係員の説明では、もう、既に規定数の鍵は全部、契約済みとの返事、さあ、新しく一ヶ、追加する事は大変な事なのである。まず、ポスト・グラデュエイトの秘書ボーム嬢といつても、もうお婆さんの哲学博士に、かけ合い、登録係りのメイ嬢に、書類を作製させ、会議にかけ、一週間後に私のポケットに銀色の小さい鍵が、フタつたのである。その間、部屋から部屋へと私は、アレン教授に肩を抱かれるように走り廻つたのである。御承知の通り、イギリスでは、人に面会する時は、あらかじめ、アポイントメントをとり、指定された時に、カッチリと訪問するのが礼儀である。最初の問、

私も一々、それを忘れず、やつていたのであるが、「君の椅子を一ヶ、研究室へ入れておくれ毎週木曜日の十一時より必ず、やつて来るように」とのこと、それ以来、何か問題を作り、それへ対する私の考えをまとめて教授の研究室へ通わねばならなくなつたのである。今年度のアレン教授の担当は「統計資料入門」、「統計的方法」、「応用統計学」、「インタナショナル・バランス・オブ・ペイメント」、「統計学クラス」、「ゼミナール」の六講座を三学期に分けて担当されている。ロンドン大学の講義の他に、英政府の「小売物価指数委員会」の委員長も兼任されており、そのため、私も研究室で官庁統計の多くの専門家に紹介して貰つたのである。ちなみに、もう、教授の近刊予定の「動態経済学」の稿も終つたとのこと、六月ごろまでは、マクミラン社より出版されるとのこと。「この書の翻訳も君がやるならやつて見なさい。私もそのつもりでいるから」とのこと。勿論、私はやつて見るつもりであるが、次は、ケンタール教授と好い対照をなす学者である。まるで「雄牛」である。現今も、統計学のテキストとして最高の地位を占めるユール教授との共著「統計学理論入門」は余りにも、日本に於ても有名であり、その他、「最新統計学理論」上・下の二冊は、この精力的なケンタール教授にして、はじめて執筆し得るものであらう。ロンドン大学へ就任される前には、イギリス船舶協会の研究部長の地位にあり、既に、その頃より「Biometrika, Journal of Royal Statistical Society」等の統計学雑誌に、全く独自の研究成果を

発表して来られたのである。ゼミナールは、非常に高度のもので、サンプリング・メソッド・ゲームの現論、時系列の解析等、この人の得意なテーマの下に、ぐんぐんとつつまれるのである。上に述べた通り、ケンブリッジ、オックスフォードの修了者も、R・G・D・アレン教授とこのケンタール教授を慕つて、ロンドン大学へやつて来るとのことである。――この稿未完――(経済学部教授)

(十頁よりつゞく)

時の人ククロオデル キク・ヤマダ
表 現 第二卷第六号 昭二四七
詩と宗教的実存―ククロオデル論 井筒 俊彦

女性線 第四卷一―号 昭二四一
ジードとクローデル 新庄 嘉章

風 雪 第四卷第三号 昭二五三
ポール・クローデル 木村 太郎

○フランス文学辞典 昭二五二
ポール・クローデル アンドレ・モロワ 敏彦訳 昭二六三

○文学研究 I 片山 健藏 昭二六三
クローデル 編者代表 中島 健藏 昭二六六

○原典による世界文学史 昭二六六
クローデルについて 稲谷 繁雄 昭二八五

図 書 第四四号 昭二八五
クローデルの詩的存在論 井筒 俊彦 昭二八八

三田文学 第四三卷六号 昭二八八
クローデルと読書 佐藤 毅夫 昭二九五

読書春秋 第五卷第五号 昭二九五
百扇帖(名著旧籍) 山内 義雄 昭二九八

新 潮 第五一巻八号 昭二九八
クローデルについて―「クリストフ・

コロンブス」と「全体劇」のこと 加藤 周一 昭二九八

群 像 第九卷一三三号 昭二九八
群 像 第九卷一三三号 昭二九八



學内報

入學式舉行

関西大学新入學式（新制大学となつてから八回目）は、四月十一日法学部、文学部、同十二日経済学部、商学部において舉行、岩崎学長の訓示に続いて新入学生の宣誓が行われた。

なお学校法人関西大学の設置する関係学校の入学式も左の通り舉行された。

四月二十二日午前十時 大学院
四月十五日午前十時 短期大学部
四月八日午前十時 第一高等学校
四月七日午前九時 第一中学校

日本私立大学連盟

関西支部理事会及總會

四月十五日（金）本学千里山学舎大学ホールにおいて、日本私立大学連盟関西支部は、午前十時より理事会を、午後一時より総会を開き、問題になつてゐる教員の失業保険強制加入の反対決議、昭和二十九年年度決算報告、役員選挙等を行つた。

当日出席大学左の通り（敬称略、ABC順）

愛知大学 庶務課長 淺野 巧美
同志社大学 学長 大下 角一
同志社女子大学 庶務課長 大倉恵太郎
関西学院大学 総務部長 原田 俯一
神戸女学院大学 学長 難波 紋吉
大谷大学 図書館 太宰不二丸
大阪医科大学 庶務課長 小西小太郎
立命館大学 総務課長 末川 博
龍谷大学 庶務課長 柳田 温暎
関西大学 学長（支部長） 岩崎 達真
商学部長（本部常務理事） 板橋 菊一
庶務課長 村上 仙三
秘書課（支部事務担当） 辻見 重行

欠席

関西医科大学、高野山大学、久留米大学
南山大学、西南学院大学、天理大学

桜田教授渡欧

法学部桜田教授は、昭和二十九年年度在外学術研究員として欧米における公法、法理一般（憲法及行政法）研究のため、四月



神戸埠頭に

三十日午後四時大阪商船「スエズ丸」で神戸港第三突堤出帆、欧州に向つた。

なお同教授は、イギリス、アメリカを中心に、その他ドイツ、フランス、イタリア、スイス、オランダ、ベルギー、スエーデン、ブラジル等諸国を歴訪する予定。

昭和三十年度就職講座及び英文タイプ講習開講

就職課では昭和三十年度就職講座及び英文タイプ講習を左の通り開講。

一、就職講座

(1) 期間 五月九日（月）より七月二日（土）まで

(2) 科目 時事英語、英作文、商業英語、貿易実務、商事解説、経済時事問題、改正会社法、労働社会、筆記

二、英文タイプ講習（才一回）

(1) 期間 四月十八日より毎週三日、水、金、六月四日まで

学会出張

- ◆ 商学部河村宜介教授は四月二日から六日まで明治大学における日本商品学会第六回年次大会に出席。
- ◆ 文学部中井駿二教授は四月八日から十日まで東京都電通別館における日本新聞学会に出席。
- ◆ 文学部末永雅雄教授は四月二十七日から五月二日まで慶応大学における考古学会に出席。
- ◆ 法学部西本寛一員外教教授は五月一日一橋大学における私法学会に出席。
- ◆ 法学部明石三郎教授は四月二十八日から五月三日まで日本大学における比較法学会及び一橋大学における私法学会に出席。
- ◆ 法学部池田定太郎教授は四月二十八日より五月三日まで中央大学における日本海法学会、経済法学会、日本私法学会に出席。
- ◆ 法学部池田榮教授は四月二十八日より五月四日まで東京教育大学における日本政治学会及び中央大学における日本公法学会に出席。
- ◆ 法学部上林良一、原英次両助手は四月二十八日より五月一日まで東京教育大学における日本政治学会に出席。
- ◆ 法学部福本喜之助教授は四月二十八日より五月五日まで学習院大学における日本独文学会に出席。
- ◆ 法学部岩本慧助教授は四月二十九日より五月三日まで中央大学における経済法学会及び一橋大学における私法学会に出席。
- ◆ 法学部植田重正教授、中義勝助教授は四月三十日より五月三日まで法政大学における日本刑法学会に出席。
- ◆ 法学部川上敬逸教授は四月三十日から五月四日まで中央大学における日本公法学会及び明治大学大学院における国際法学会に出席。
- ◆ 法学部本浪章市助手は四月三十日から五月四日まで東京大学における国際私法学会及び日本大学における私法学会明治大学における国際法学会に出席。

学生



硬式野球部

昨年度春秋とも関西リーグの覇権を逸したが、今年度春季リーグ戦は四月十六日、日生球場にその幕を切つて落した。本学はその第一戦に同大と対戦、延長十回の末日没引分けとなり、以後立大に二勝、同大と再び一勝一敗決勝に持ち越し、神大に二勝という戦績であるが、後、同大との決勝戦、対京大戦、最終には対関学戦を控えているので、今後一層の精進が望まれている。此れ迄のスコアは次の通りである。

4月18日	関大	00001000000000	00	11	於森の宮
4月29日	立命	10000010000000	00	103	於森の宮
4月30日	立命	11000300001020	1A	67	於森の宮
5月3日	同大	10200000000010	0	72	於森の宮
5月4日	同大	00100002000000	0	62	於森の宮
5月7日	神大	00020000000000	00	30	於森の宮
5月8日	神大	00141020000000	0A	113	於森の宮

剣道部

四月二十九日、第二回関西学生剣道、しない競技選手権大会が京都市警察学校道場で行われたが、本学の腰塚が初優勝を遂げた。

準決勝

腰塚(関大) 1-10 宇治田(関学)

西川(阪大) 2-11 水田(西京大)

決勝(関大) 1-10 西川(阪大)

拳斗部

第三回日本ゴルフデングロブ・ボクシング選手権西日本地区大会第一日は大阪府立体育館で、四月二十六日午後五時三十分から行われたが、本学関係の準決勝進出者及びその成績は次の通りである。

準決勝

ジュニア級 牧(関大) 判定 長谷(四高) 出

フライ級 光野(中) 判定 佐藤(関中) 大

バンタム級 稲葉(関大) 判定 本間(中) 大

ライト級 平田(関西) 判定 所(関中) 大

ウェルター級 田中(八輪製鉄) 判定 遠藤(関中) 大



於 サンチエゴ 米海軍招待試合

翌二十七日午後六時より西日本代表を決定する決勝戦が行われ本学関係の戦績は次の通り。

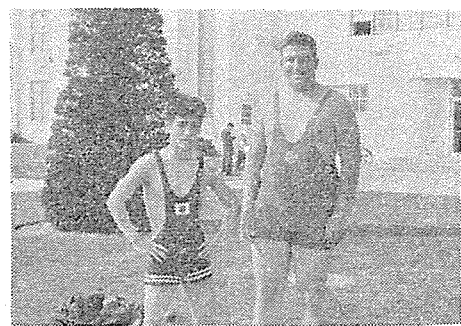
ジュニア級 栗本(中) 判定 牧(関大) 大

フライ級 フライ(西) 判定 笹岡(中) 大

バンタム級 稲葉(関大) 判定 笹岡(中) 大

軟式野球部

四月十三日関西軟式野球リーグが開幕されたが本学は予想を覆がえし、完全にリーグホース振りを発揮、優勝候補同大をしりぞけ8勝1敗1分で優勝した。



於 ロングアイランド 全米選手権大会
左フライ級チャンピオン 右ヘビー級チャンピオン

相撲部

新しく有望選手を多数獲得した相撲部は五月五日、藤井寺でシーズン開幕第一戦である関西学生新人戦に出場、本学、斎昭夫は、関学、川越を破り優勝した。今年度の活躍が期待されている。

レスリング部

昨年の米国遠征に引き続き、本年も本学からは、日本代表として横山、清谷利次を送つたが、横山は全米レスリング選手権大会に出場、フライ級で、フリー、グレコローマン両種目で優勝する偉業を樹てた。

4月23日	関大	12	11	大阪大学
4月25日	関大	14	10	大阪大学
4月26日	関大	4	1	立大
4月27日	関大	7	1	同大
4月28日	関大	2	1	立大
4月29日	関大	8	1	関学
5月6日	関大	4	1	関学
5月7日	関大	4	1	関学



校友 バツチ

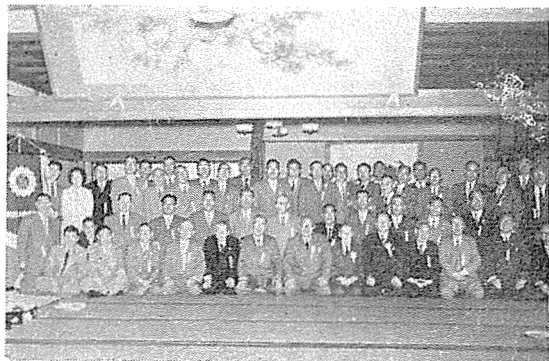
校

友

大阪支部総会

大阪支部春季総会は五月五日(祭)若葉薫る長岡天神境内「錦水亭」に於て開催、午後一時より長岡天満宮宮司中小路宗康氏の天満宮由来の講演あり終了後開会、中務支部長の挨拶並びに新入会員の紹介の引続いて、白川理事長、岩崎学長の母校近況報告あり、一同その発展ぶり

大阪支部総会



に意を強くする。尚この度創刊された校友機関新聞「関大」に付、長柄校友会副会長より購読及び寄稿広告等に就て協力の要請があった。

二時開宴、三時閉宴記念撮影の後、三々五々附近の滝井農園を見学解散した。出席者(五十一名)

来賓 白川理事長 岩崎学長 矢野常務監事 中小路長岡天満宮宮司

文部側

- 阿部 甚吉 阿久根幸吉 青野 実雄
- 今泉 利秋 梅原貞治郎 海野 円城
- 岡本 重治 織田佐代治 大石雄一郎
- 大月 伸 大島 武夫 榎本 信雄
- 神屋敷民蔵 神吉 元夫 北原 元実
- 阪本 竜夫 下条小野右衛門 白井 正英
- 波川 鶴蔵 島 良司 関 豊馬
- 殿林作太郎 田中 一郎 多賀谷 宏
- 富永 竹夫 中谷 政明 長柄 金吾
- 中務 平吉 中村 敏雄 平井 三朗
- 松本芳太郎 村尾 静明 村上 精三
- 森川 太郎 山崎 敬敏 山田 一元
- 山根 滝蔵 八木太太郎 大和 英雄
- 吉村 種蔵 横田長次郎 四辻 章雄
- 米田 恒治 秋山 恒三 安井 章吾
- 土橋 四三 秋山 恒三

朝日生命千里山会總會

朝日生命千里山会も会員三十一名を数えめざましい進出を遂げつゝあり、彌生二十九日(火)午後一時より昭和二十九年最後の例会を大阪は南の中心地、心齋橋南詰蓬莱閣に於て北京料理に舌鼓を打ちつゝ開催。

此の日は年度末の総決算期の為、欠席者も多かったが、新年度を迎えて四月一日より寺西、酒井両氏が東京本社へ転勤され且つ広田氏が独立扱になられたお喜びを兼ねて和氣霽々裡に学歌を高唱し母校の彌栄を祈りつゝ楽しく年度末の例会を閉じた。

出席者

- 鳴尾芳太郎 田中 俊一 広田 憲信
- 高橋 実 寺西 三郎 岸本喜代治

千里山昭八会

三月四日(金)午後五時半より平野町やお政に於て第三十一回例会を開催、久振りの集りとなつたので……待ち遠しかったぞ……と破顔一笑大声居士もいて先ず幹事が怠慢を責められる有様、幹事報告事項を終り、次いで昭和三十年以降の幹事選任の件を議題に供して改選の結果左の通り決定した

幹事に

- 浦野健二郎 一瀬 義次 大島 武夫
- 中家 利郎 長沢 健一 吉田 一郎
- 野田 文雄 賀本 敏英 平井 三朗
- 松下 忠夫(京都) 多賀 恒一(神戸)
- 松野 幸吉(東京)

選任された幹事は辞退を認めぬことにして小宴に入る。幹事より今回新市制が実施された松原市の初代市長選に出馬した浦野氏に対し衷心から激励の辞を贈り且つ必勝を祈つた。今回は懇々名古屋から板倉氏が、また久振りに神戸から百石瀬郷の両氏が出席してくれたので宴は益々愉快なものになり時の経過も打忘れた感であった。名残りを惜しみつゝ学歌を高唱して午後九時半散会した。

出席者

- 板倉 保夫 藤岡 勇 結城 丙太
- 田淵 三郎 美吉克之祐 大川 三三
- 長沢 健一 浦野健二郎 百石 義雄
- 中江 健一 尾下 滝雄 中家 利郎
- 斉藤 正興 吉田 一郎 大島 武夫
- 瀬郷 清市 宮脇 慎三郎 野田 文雄
- 賀本 敏英 平井 三朗

修士会新修士茶話会

三月二十三日大学院に於て修士記授与式直後、新修士よりの記念品を(大鏡一面)大学院へ贈呈した。新修士記念写真撮影後茶話会に入り、白川理事長始め岩崎学

長、指導教授等多数出席、白川理事長の健康に注意せよ、岩崎学長、中谷大学院部長、池田、飯田、矢口諸先生の今後社会に出てからの注意、又研学もこれ終ることなく続いて研究せよ等最後の茶話会にほろりとした。小題後新幹事選出、住所訂正、連絡事項打合せ、出席者に修士記念灰皿を進呈し午後三時散会。

出席者

- 白川理事長 岩崎学長 中谷大学院部長
- 其他各教授
- 新修士側
- 奥山 久明 周藤 秀之 吉田 嘉高
- 李 寿容 田原 扶 紅露 喜昇
- 下村 和千 中司 信夫 夏川 正昭
- 新谷 八郎 城内 国二 土橋 輝弥
- 沢田 隆 長野 正 関田 昭
- 森 久隆 正木 明 播磨 博
- 九十九万樹 小西愛之助 中野 真策
- 小久保実 吉川 直 仲田 幸雄
- 山本 和夫 白井 種雄 岡本 信久
- 福岡 修 松山 雅己 木村 弘一
- 其他 宮田修士会長 藤井副会長

春秋会總會

三月二十六日午後五時より市内来山閣



春秋会總會

に於て今回外遊される安田信一教授の壯行会を開催、多数の参加者があり記念撮影など、和気藹々裡に意義ある一夕を過ごし、午後九時盛會裡に散會。

出席者(順不同、敬称略)

安田信一教授
小林 正立
中野 山藏
今井 康兼
山本寅之助
油谷 重男
保井 剛一
藤原 福雄
二森 敬明
戸部 智夫
松原 藤由
正治
吉田 勝
山下 重彦
池田 正三
吉川千代造
西野 義輝
吉田 勝

東京支部總會

東京支部總會は三月二十六日(土)銀座八丁目エーワンに於て開催。母校より岩崎学長を始め木村、森川両教授出席、



東京支部總會

在京板橋教授の外に過般の選挙に於て当選された北村徳太郎、山本勝市両代議士が国会開會中御多忙にも拘らず出席せられたのは望外の幸であつた。

中山支部長の挨拶に次いで、学長はその話の中で前記の山本氏と本日久し振りに出席された画家島海青氏との予期しない会見を非常になつかしがられ、校友会の意義ある点を感銘深く語られた。木村先生は学内の近況を要領よく説明、続いて森川先生は昨年欧米視察の途次印象深かつた数々の出来事の中の一駒を語々と話し、一同興趣盡くる処を知らない有り様であつた。山本代議士は在学当時の思い出と政治生活上の信条をユーモラスな口振りで話され、平岡顧問の挨拶終了と同時に食事に入り、其間順次自己紹介となり各自個性發揮の語振りに時の経つのを忘れ、万歳唱和、記念撮影の後十時過ぎ散會。

出席者

岩崎学長 木村教授 森川教授 板橋教授
母校側
支部側
北村徳太郎 山本勝市 平岡 啓道
本郷 桂 田辺四郎 長谷川天地
中山 幸三 畑 孝二郎 鈴木 康之
中村 簡吉 藤本比佐志 島海 青児
香西 政一 福部 章 中村 峰藏
飯河 琢也 木塚 正次 通藤 敏雄
萩野 勉 井口 一 渡田 昇一
田中 壽造 堀 義宏 隈玉市太郎
筒井 孝造 大岡 親太郎 沢田 勇夫
丸物 喜一 森本 定雄 小原 憲南
家長 侃 土居 康成 星野 代治
門田 博 宮川 寿幸 尾野 賢治
塩崎 博 堀 栄治 山 崇治郎
岸副 芳郎 本田 捨松 西垣 房二
三枝 芳郎 友夫

五十経會(昭十三專二経)春季總會

五十経會の春季總會は四月九日(土)午後六時より肥後橋の大新樓で開かれた当日は森川博士の渡英談に華が咲き、在学時代の思い出話に春宵を惜しむことしばし、何時盡くるとも知れぬ程盛會裡に九時散會。

出席者

森川教授 安井校友課長
員
稲野治平衛 佐藤 寿夫 田岡 隆
中山一義 日保 正三 平沢 豊一
藤井 武 大野 惟徳

千里山十期會

四月十日(日)午前十時、想出深かき千里山上の大学院ホール、次々と新築相



千里山十期會總會

成る白壁の殿堂階段教室等を見学、二十年二昔と比較してみると想像以上の今昔の差を新たにし、今を盛りと咲き乱れる桜の花をホールの窓ごしに眺めつゝ、大い側より久井専務理事を迎え、春季總會を開催、卒業式拾周年記念事業として大いへテント寄贈等、いつまでも盡きせぬ懐古談に名残りを惜しんで午後三時解散。

当日出席者

浅野 時男 岩崎 義雄 江里口春志
榎本金次郎 川並 秀雄 河内 兼三
左海 伊和 野間 秀泉 飛田 陽一
本多 喜慶 森 鈴次 藤下 善雄
柳田 栄次 矢野 文雄 中山 嚴

昭六會春季總會

陽春四月二十五日午後五時より千里山第一高等學校々庭に於て万葉と咲き乱れる桜花の下新緑の若草をしとねに、はるかにかすむ浪速の春を愛でながら昭六會春季總會を行う。参会する者十七名、当日三十年度幹事改選を行い、幹事長に上野、幹事に楠井、福原、小野の四名が選任された。新装なれる校舍に又この佳絶なる環境に学ぶ生徒の幸福を語り、発潮たりし青年の日を懐しめながら、獄談に時を忘れ母校の發展を祝福しつゝ午後七時散會。

出席者

有賀 詞郎 吉野 昌平 今井 憲夫
上野 俊彦 小野 武一 喜田 由蔵
楠井 文夫 後藤 幸重 齊藤 善三
鳴尾芳太郎 羽瀨 博 久井 忠雄
福原菊治郎 三谷 久男 岡田 文三
柳沢 幸治 吉川 敬一

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸統左記の通り御寄附をいただきました。四月十五日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和三十年四月

学校法人 關西大學

關西大學七十周年記念

拡充資金寄附者芳名(十二)

昭和三十年四月十五日現在(順序不同、敬称略)

一、篤志家の部

金五万円也 大門 正喜
金五万円也 匿 名 氏
金貳万円也 匿 名 氏
金壹万円也 矢野 茂次 商店
金壹万円也 匿 名 氏
金壹千円也 匿 名 氏
金壹千円也 匿 名 氏
金壹千円也 匿 名 氏

計金拾四万四千円也

累計金八百九拾参万九千五百円也

二、關係業者の部

金貳拾万円也 泉州銀行(才一、二回)
金拾七万円也 万年社(才一、二回)
金五千円也 藤岡商事株式会社
計金参拾七万五千円也

累計金七百七拾六万壹千五百円也

三、校友の部

1 地方支部
イ 池田支部(才一回)
金貳万円也 東稔 頼義(昭10大 政)
金壹万円也 弓庭 元一(大6専 法)

2 同期会

昭六会(才九回)
金五万円也 昭六 会
金壹万円也 福田 義美
金五千円也 秋広馬佐一
金参千円也 鎌田 賤夫
計金六万八千円也
累計金八拾万八千円也

十期会(才九回)
金壹万円也 飛田 陽一
計金壹万円也

累計金四拾八万八千円也

五十経会(昭13専二経)
金貳千円也 稻野治兵衛

金貳千円也 德井 悅郎
金壹千円也 平沢 農一
金壹千円也 中山 義一
金壹千円也 北本 誠一
計金八千円也
累計金貳百九拾六万参千円也

3 個人

金壹万円也 森田 壽(昭13専一商)
金壹万円也 熊本 由吉(大3専 法)
金五千円也 福井 喜島秀太郎(昭3大 法)
金五千円也 喜島秀太郎(昭3大 法)
金参千円也 本井 吉雄(昭11大 法)
金参千円也 竹田 繁七(大15大 商)
金参千円也 森本 定雄(昭14専二商)
金参千円也 河野 益夫(昭5専 商)
金貳千円也 川崎 武雄(昭14大 政)
金貳千円也 井並 則之(昭10専一経)
金壹千円也 上野喜重造(大2専 法)
金壹千円也 一本 正光(大11専 法)
金壹千円也 本井 巽(昭12専二法)
金壹千円也 山田 義雄(昭2大 法)
金壹千円也 岡部 重信(昭12大 法)
金壹千円也 桑原 勝市(昭14専二法)
金壹千円也 木村 吾郎(昭28短 大)

四、教育後援会の部

金壹万五千円也 椿 本 良夫
金壹万五千円也 出口 祥介
金五千円也 柏原 信昭
金五千円也 松本 倉雄
金五千円也 岡野 俊次
金参千円也 大村 惠留彦
金参千円也 下村 勝彦
金参千円也 奥村 利之助
金参千円也 甚川 浩一
金貳千円也 前川 利之助
金貳千円也 河野 益夫
金貳千円也 小坂 米雄
金貳千円也 津田 輝人
金貳千円也 来住 哲二
金貳千円也 辻藤 重治
金貳千円也 武藤 卓一
金貳千円也 萩原 富徳
金貳千円也 岡村 富徳
金貳千円也 野呂 善徳
金貳千円也 川根 善徳
金貳千円也 石田 徳蔵
金貳千円也 太田 徳太郎

關西大學創立七十周年記念 拡充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律學校として開校したのでありますが、爾來六十有余年校友先輩の苦心と不断的努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私學の雄として、自他共に許す一大學園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、國家社會の進運に大きな寄与をなしたことは、われわれの深く喜びとするところであります。學園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く獨立國家として出發しましたが、國家の前途は甚だ多難であります。わが國は今後、文化國家として世界文化に貢獻すべきであります。またそれによつて友邦の信に込えなければなりません。そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本學は、大學の崇高な使命を自覚すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、學の美化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本學が新學制に基き、各大學にさきがけて、大學院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において將來の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本學は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計画を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大學院、大學ホール、經濟部 商學部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計画中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法學部 文學部學舎の改築、二部學生を收容するための天六學舎の増築、學生に対する施設の一部として、千里山尚志館（學生食堂學友會部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着手準備中ではありますが、また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には學園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大學の眞価を決する教授陣容の充実にあります。二十八會計年度においては教授十名、助

教授八名、專任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員の待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。教授陣容の充実に共に、研究用圖書の完備も大切であります。この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、學舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の經濟的混亂により本大學法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御齎出を仰がねばならぬ実情にあります。

大學の生命は不朽であります。が、學園の生々發展を希うためには、各位の學園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、學園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、學園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩 崎 卯 一
關西大學理事長 白 川 朋 吉

創立七十周年記念事業學舎増改築概要

一、工事費総額約三億三千五百万円

二、工事概要

- (一) 千里山法學部 文學部學舎改築（鉄筋コンクリート造）
 - 三階建 一千六百六十八坪 工費約二億六千四百万円
- (二) 天六學舎増築（鉄筋コンクリート造）
 - 五階建 三百七十八坪 工費約三千万円
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百万円
- (四) 關西大學第一高等學校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百万円